

阪神大震災における被害・利用実態をふまえた 神社空間のあり方に関する考察

Research on Shrines' Damages and Roles as Refuges
Caused by *KOBE, OSAKA* Earthquake

近藤隆二郎*
Ryujiro KONDO

1. 研究の背景と目的・方法

(1) 背景…阪神大震災

1995年1月に起こった阪神大震災の被害は周知のとおりである。公園や校庭といった空間が避難時に活用されたことをふまえて、新たな機能を付与された複合空間としての整備等について提言されつつある¹⁾。その一方で、伝統的な村落集落においてはコミュニティの場でありかつ立地的にも防災拠点としての役割をも付与されていた神社空間についてはあまり注目されていない²⁾。メディアで著名な神社の被害状況は確認できるが、ムラの神さまといった小規模な神社の状況は把握されていない。

(2) 目的…神社への視点

本研究の目的は2点ある。まずは、神社空間の被害状況および利用状況の把握である。神社が持つ空間性・社会性はどのように震災時に利用されたのか。あるいは、被害甚大で被災者の要望に応えられなかったのか。もう1点は、災害時の被害・利用実態の結果から、神社空間デザインのあり方への示唆を得ることである。

(3) 調査方法

(a) 現地調査 (3月4日～6日)

現地調査前に「神道青年全国協議会 (以下「神青協」)」より被害状況データを入手。そのデータを参考に、現地調査地帯を灘区・東灘区・西宮市・芦屋市域の阪急電車以南にほぼ決定 (全53社)。調査方法は50ccバイクを使用し、対象神社空間の現況撮影、8mmVTRによる現況撮影、宮司その他関係者へのヒアリング (17件)、現地観察などを調査者1名で実施した (表1)。

(b) 分析方法

被害状況と利用状況に分ける。「神青協」収集データから被害の全体的傾向を把握し、現地調査より空間要素別に被害実態を考察した³⁾。利用実態には、ヒアリング

表1 調査対象神社数一覧

地域	現地調査神社数	ヒアリングした神社	対象者
灘区	12		
		歌馬神社	灘区岩屋町 宮司・家族
		素佐男神社	灘区岸地通 参拝者
		船寺神社	灘区船寺通 宮司・家族
		若宮神社	灘区新在家南町 利用者
		六甲八幡神社	灘区八幡町 副宮司
		丹生神社	灘区高羽町 神職家族
東灘区	13		
		弓弦羽神社	東灘区御影町 副宮司
		本住吉神社	東灘区住吉宮町 宮司
		春日神社	東灘区北青木 宮司
		稲荷神社	東灘区森北町 神職家族
芦屋市	5		
		打出天神社	芦屋市春日町 神職家族
西宮市	23		
		岡太神社	西宮市小松南町 宮司
		八幡神社	西宮市上鳴尾町 参拝者
		福応神社	西宮市今津大東町 神職家族
		松原神社	西宮市松原町 神職
		西宮神社	西宮市社家町 権宮司
		廣田神社	西宮市大社町 神職

表2 神青協による報告神社数一覧

No.	地域	確認数
1	明石市	8
2	西区	6
3	垂水区	3
4	北区	8
5	須磨区	4
6	長田区	2
7	兵庫区	11
8	中央区	10
9	灘区	9
10	東灘区	8
11	芦屋市	2
12	西宮市	19
13	川西市	3
14	伊丹市	6
	計	99

※未確認は省略

データを整理して考察した。

2. 神社空間の被害実態

(1) 全体的被害実態の傾向

神社空間の被害状況は、小規模の被災も加えると京阪神全域という広範囲で被害が確認できる。「神青協」に報告された被災状況内容をもとに全体的な被災実態を推測した (表2)。なお、報告内容を鳥居・灯籠・狛犬・玉垣・石造物・手水舎・社務所・拝殿・本殿に要約した。

被災度を倒壊や崩壊等の「全面被害」、半壊や壁損傷等の「部分・軽微被害」、「被害なし」に分けると、長田区・灘区・東灘区・西宮市といった被災中心地域で被害が大きいことがわかる (図1)。被災周辺地域では、

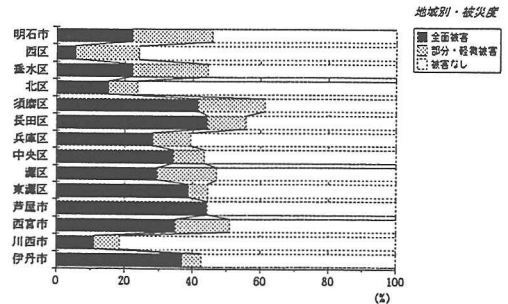


図1 神社境内・地域別・被災度割合

Keywords: 環境計画, 公園・緑地, 空間設計

*正会員, 工博, 和歌山大学システム工学部講師

(和歌山市栄谷 930, tel:0734-54-0361, 〒640)

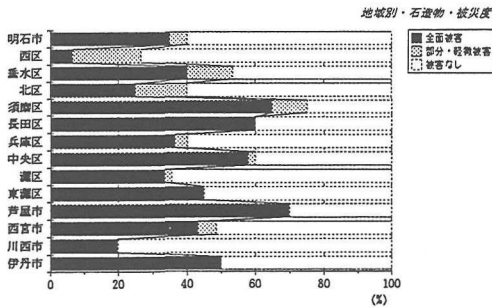


図2 神社境内（石造物）・地域別・被災度割合

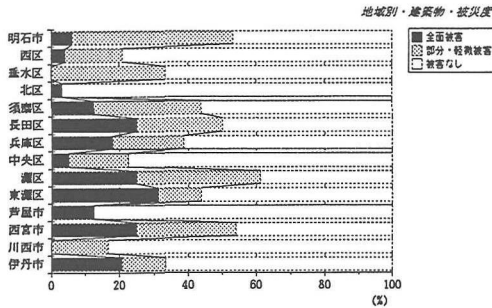


図3 神社境内（建築物）・地域別・被災度割合

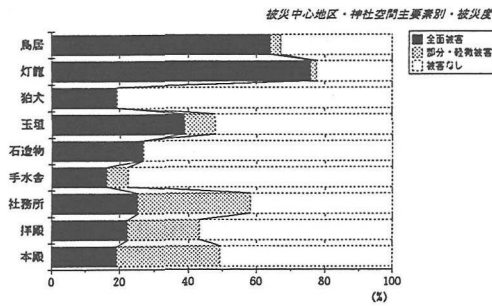


図4 被災中心地区・神社境内主要素別・被災度割合
(被災中心地区=長田区, 兵庫区, 中央区, 灘区, 東灘区, 芦屋市, 西宮市)

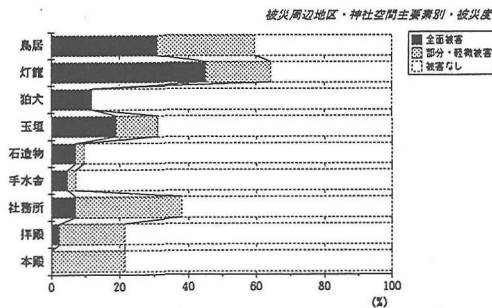


図5 被災周辺地区・神社境内主要素別・被災度割合
(被災周辺地区=明石市, 西区, 垂水区, 北区, 須磨区, 川西市, 伊丹市)

北区や川西市といった内陸部では被災度が下がるものの、明石市といった臨海地域では被災度はそれほど下がらない。鳥居や灯籠などの石造物と本殿や拝殿などの建築物とに分けて被災度をみると、石造物の被災度は建築物の

被災度よりは比較的地域差が小さい(図2, 図3)。石造物は「揺れ」に対して弱いと言えよう。

主要素別の被災度を被災中心地区と被災周辺地区とに分けた(図4, 図5)。鳥居と灯籠の被害が大きい。社務所や拝殿などの建築物では、半壊等の部分的被害も多くみられるのに対して、鳥居や灯籠、玉垣等の石造物ではほとんどが全面的被害である。被災周辺地区でも、石造物に被害が集中する同様の傾向がみられるが、部分・軽微被害もみられる。神社空間の被害は、鳥居や灯籠といった石造物と古い建築構造物が中心であり、神木や鎮守の森といった自然要素の被災は少ない。

(2) 空間要素別の被害実態

現地調査地域における神社空間の被災実態の具体例を、参道空間・社殿空間・自然要素空間に分けて述べる。

(a) 参道空間

ほとんどの燈籠、狛犬といった石造物は倒壊している。玉垣は鉄筋があっても連鎖的に負荷を受けて倒れている(図6)。地震という揺れに対する脆弱性が指摘できる。とくに、小規模の神社では参道空間が倒壊した石造物で埋められてしまい、通行や参拝が不能となりかつ危険な空間となった。多くの石造の鳥居も中心部分が落下して危険であ

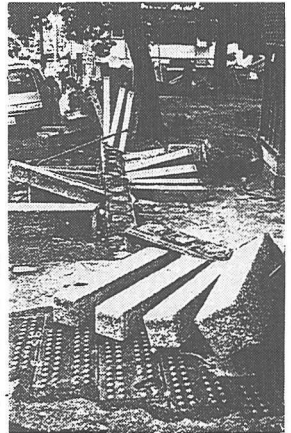


図6 灘区春日神社の玉垣 3/4 いった。重い石造物は復旧の障害にもなった。

(b) 社殿空間

手水舎などは屋根を細い柱で支える簡易構造であるために容易に倒壊した。本殿および拝殿も重い屋根を支えきれずにペシャンコになる被害が多く見られた(図7)。

しかしながら、本殿は拝殿に比べて小規模であるためか拝殿よりは被害が小さい

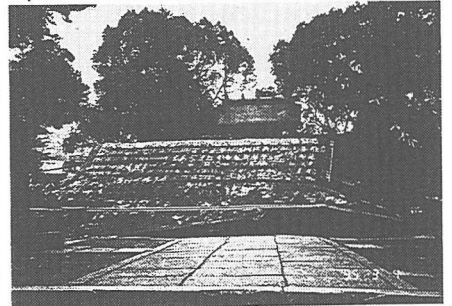


図7 東灘区網敷天満神社 3/4

傾向も見られた。鉄筋コンクリート造の社殿等は被害が小さかったようである。併設される神楽殿や社務所なども同様の被害を受けた。摂社・末社といった小祠は転げ落ちるといった被害が多かった。小規模の神社では社殿が倒壊するとほとんど空地が無くなる状況にあった。構造や空間構成の再検討が求められる。

(c) 鎮守の森・樹林・その他の自然的要素

境内の樹木のほとんどが地震被害を受けなかった。「鎮守の森」の意義が再認識されると思われる。

3. 神社空間の利用実態

ヒアリング調査等から確認できた神社空間の利用実態について、利用形態別に考察する(表1参照)。

(a) 避難所/短期(余震からの避難)

敏馬神社(灘区)では、被災直後に境内山手の鎮守の森に近隣住民が避難した。「鎮守の森で夜を明かしたのは一晩だけです。家も残っているけれども恐いという方や家もつぶれた方など30人ぐらいだけでしたけど。木の下は安心だからということで。余震だなんて思っても安心でしたから。私たちがこの蔵がありましたけど、やっぱり森で寝ました。」というように、震災直後の短期的避難所として鎮守の森が機能したことを確認した。また、拝殿倒壊等の被害が大きい須佐之男神社(西宮市)境内の森では石油ヒーターや紙おむつ、たき火などの痕跡があり、避難地として利用された形跡と思われる。また、六甲八幡神社(灘区)、本住吉神社(東灘区)、岡太神社(西宮市)などでは、被災直後に避難して来た人々があつた。避難者の多くは順次公設の避難所に移動した。六甲八幡神社では「被災直後に集まってきたが、(避難していただく)場所がないもので。マイクロバスを持っているので、だいたい800人ぐらい各避難所に振り分けてお送りした。」という。

(b) 避難所/長期(滞在型避難所として)

西宮神社(西宮市)・船寺神社(灘区)では会館(結婚式場)を住民に開放し、公設の避難所として利用された。「私自身が17日に寒さに震えているお年寄りを見かねて中にお招きした。宗旨にはいっさい関係なく、とにかくにも周囲の方ならどうぞと。占拠されたわけではない(船寺神社)。「商店街が壊滅状態になり、自然的にうちに入ってきてくれました。神社会館に避難してこられましてね。自然発生的にうちが避難所になりました。400人ぐらい避難をしておられました。」(西宮神社)。大規模避難所としての利用は、鉄筋RC造のよ



図8 滞在型避難地として利用(東灘区八坂神社 3/4)

うな建物がある場合に限定されよう。小規模の神社である八坂神社(東灘区)でも境内にテントが張っており、滞在型避難所として利用されていた(図8)。稲荷神社(東灘区)では、「次の大地震が来たら家が壊れるだろうという方や、次ぎ(地震)が来たら恐いということで車でここに寝てらっしゃった。ここを避難所にしようと、テントを建てて共同生活をしました。火をおこしてご飯を炊いたりしました。最初のうちは34人、5世帯ほどここに車で寝泊まりしていました。」という自主コミュニティ的な避難所として利用された。

(c) 救援拠点

神社境内に地区センターや公民館などが隣接する場合には、境内も救援拠点として利用されていた。

(d) 水の提供/湧き水・井戸・手水舎

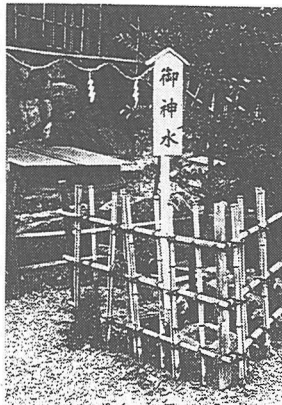


図9 西宮市廣田神社境内の御神水 3/6

神社境内には手水舎や井戸などがあり、断水時には近隣の人が水を求めに来た。しかしその多くは枯れ井戸や水道利用のもので、ほとんど機能しなかったという。広大な敷地を持つ廣田神社(西宮市)境内には御神水としての湧き水および裏山にも湧き水があり、「水が出ないということで、湧き水が御神水としてあったので、そちらのお水を取りに

(e) 安心感の提供/清浄な空気・参拝

来られた。一番よくこられる方で2時間半か3時間も待っていました」と近隣だけでなく遠方からも清浄な水を求めて人々が殺到した(図9)。

神戸の山側高台にある稲荷神社(東灘区)では、「みなさん下の方がときどきここへ来て、緑の空気を吸ったらほっとするっておっしゃてました。お参りかたがたここまであがらしてもらったら気持ちが落ちつきまして。」と、清浄な空気(おそらくは安心感も)を求める参拝者があつた。多くの神社では参拝という行為を保証するた

めに、被災した本殿の代替として「仮殿（仮宮）」を設置していた。日頃参拝していた人々が安心したり、無事を感じるといふ。

(f) 空間の提供／遺体安置場所・駐車場・洗濯物干し場
被災直後には空間（空地）そのものが少なく、ある神社の兼務社境内は他に場所がなく遺体安置所として使用された。また、避難所に隣接する神社では、避難者の駐車場や洗濯物干し場として境内が利用されていた。

(g) その他／通過道路（安全な近道）など

弓弦羽神社（東灘区）では、阪急御影駅とJR住吉駅をつなぐ安全な近道、通過交通路として境内が利用されていた。六甲八幡神社（灘区）では、ゴミが不法投棄されて問題になっていた。八幡神社（西宮市）では、近隣の人が休むためのものか、テーブルが置かれていた。

4. まとめ

(1) 神社空間が利用された条件

①空間（余地）の存在…ほとんどの石造物が倒壊しているために、小さな神社では倒壊物が充満して利用できない場合が多かった。逆に、ある程度の規模を持つ神社空間は、倒壊物を避けることにより利用が可能となった。

②自然的要素の存在…湧水や鎮守の森といった自然的要素の存在が、多種多様な利用を促進した。石造物と建築物だけでは利用形態が偏っていたと思われる。

③頑強な社会的施設の存在…滞在型避難所として利用されたのは、信徒会館・結婚式場のような強固な建造物であると同時に、宗教施設というよりは氏子のための性格を持つ社会的施設である。RC造りであっても、拜殿などが避難所として利用されることはなかったと思われる。

④日常的利用者の認知…参拝や祭り、散歩などで神社空間に対して接する機会を持っていた近隣住民は、神社境内の規模や自然条件について認知度が高く、緊急の避難先や水などを求めて集まったと思われる。

(2) 今後の神社空間デザインへの視点

①危険性の排除・低減…「今後、石造物で鳥居などを建てることは近隣の住民の不安感からも不可能になるのでは。」という声も神職から聞かれたが、少なくとも石造物を限られた空間に詰め込むことは見直されるべきだ。

②自然的要素の保全、管理…震災被害が微少であったことから、多様な利用を保証する自然的要素の保全が望まれる。従来より鎮守の森は、自然界の多様な生物相の種の保存を可能にする場としての重要性も指摘されてき

たが、サバイバル的な状況が短期的に浮上した際の人間にとって、精神的にも生物的にも有益であった。

③プロポーション (proportion) の導入…上記より、神社の空間構成にプロポーション概念の導入を考えたい。小規模な神社と大規模な神社とが、ほぼ同じ規模・量の建築物や石造物を持つことは、小規模の神社空間の危険性を高める。境内規模に応じて、自然要素と人工物要素の比率にある程度の割合（プロポーション）が共有化していれば、小神社は建築物や石造物の規模は小さくなるものの、小さな森や余地要素をそれなりに担保できる。

(3) 今後の方向性

もともと神社は神籬（ヒモロギ）や磐境（イワサカ）といった自然要素への信仰空間が起源とされている。このことから考えても、強固なRC造りという方向だけではない神社空間のあり方も探るべきであろう⁴⁾。復興事業の区画整理等で神社空間が合祀される等の状況に直面しているということに危惧を覚える。神社空間はもともと複合（機能）空間であり、多様な集落との関係を担っていた。その価値は、A) 変わらないものとしての価値 [歴史性], B) 自然地としての価値 [自然性], C) Open Space としての価値 [空間性], D) 聖空間としての価値 + コミュニティ [人間性] とすることができる。神社の復興は復旧が第一とされている。震災時の体験をふまえて、次世代の神社像を提案してもよいのではないか。神社空間の保持していた複合性を現在のコミュニティで再生するように、新しい複合空間として高齢者施設やコミュニティ施設などとの複合が考えられる。また、自然要素の重視性から、自然への畏敬を伝達する空間 + 自然生態系を再現する空間（ビオトープ）としての神社（「ビオ神社 (Bio Shrine)」）などが考えられる⁵⁾。震災時に仮設された神社空間を場とするコミュニティの展開にも注目したい。神職の役割 (interpreter) も問われている。

最後に、神膏協の阿部明徳氏、服部天神宮加藤芳哉氏、神社新報社服部匡記氏、各調査対象神社の方々に御礼申し上げます。

註

- 1) (社)日本造園学会阪神大震災調査特別委員会(1995):公園緑地等に関する阪神大震災緊急調査報告書,同発行。
- 2) 情報が錯綜しており、社会学などで神社空間を調査対象とした研究事例などを探している。
- 3) 調査時期は震災後2ヶ月弱経過し、既に修復を開始している神社もあり、現地調査を補足するために用いた。震災直後に電話等で収集されたデータであり、若干の誤差が含まれると思われるが、マクロ的な傾向の把握には問題ないものとした。
- 4) 極論を言えば神社は御柱(ミハシラ)だけでよいのではないかという意見もある。
- 5) その一例が山形県朝日町の「空気神社」であろう。